

2012年11月6日

奨学生レポート

西田 祐木

Carnegie Mellon University, Information Networking Institute,
Master of Science in Information Technology-Mobility コース所属

今年の秋から Carnegie Mellon University で留学しています、西田祐木です。現在、スマートフォンを中心としたモバイルアプリケーションに重点を置いたプログラムで勉強しています。このレポートでは、大学院留学を考え始めたきっかけから、出願、進学先の決定までの経験をご報告します。

1. 大学院留学を考えたきっかけ

私が留学を思い立ったのは、学部3年生の夏(2010年)に東京大学で行われた海外大学院留学説明会に参加し、その直後にカナダとアメリカに1ヶ月滞在したことがきっかけでした。この旅行は当初、少し海外に行ってみたいという興味を満たすことが目的で、知り合いが行っていたバンクーバーの語学学校に2週間通い、そしてカリフォルニア大学サンディエゴ校で開かれるサマープログラムに2週間参加するという予定だけが決まっていました。しかし、旅の直前に海外大学院留学説明会に参加して、海外の大学院で学ぶという選択肢を知った事が、旅の中での自分の意識を変えました。空き時間にできる限り海外の大学を見ようと思い、五つの大学のキャンパスを見学しました(University of British Columbia, UC San Diego, UCLA, UC Berkeley, Stanford University)。

この旅での経験は今でも強く覚えています。最初に行った語学学校で出会った南米の学生達は授業中に先生に近くのパールの割引券を渡すような不真面目な時もあるが、積極的に質問する真面目さも持っていました。それを見た自分は啞然とすると共に、彼らの勉強に対する姿勢を見習いたいと思いました。様々な国から集まった学生達と学べる環境は、東京で20年以上勉強し続けた自分には刺激的でした。UC San Diegoでは大学の寮に2週間滞在する経験もし、アメリカ最終日にStanfordに行った時には、日本で同じ大学の大学院に行くのとは生活、勉強ともに全く違う経験が待っているのだということがよく分かりました。「またここに学生として戻ってこよう」と決意して、サンフランシスコを去りました。

2. 出願

私は今年秋からの留学を希望し、アメリカの13の大学に出願し、最終的にはCarnegie Mellon University(CMU)を含め、6校に合格しました。出願の準備を本格的に始めたのは2011年の年初からで、TOEFLの対策から始めました。出願先に関しては卒業研究がある程度進んだ段階で考えるつもりだったので、とりあえず必要なことから手をつけた次第です。卒業研究では留学生を積極的

に採用していて、なおかつ自分の興味とも一致している研究室があり、その研究室を希望して配属されることができました。指導教員には配属した時点から留学する事を相談する事ができ、様々な無理も聞いていただいた事に今でも感謝しております。特に、11月上旬に8月に受けたGRE(アメリカの大学院出願で必要となる統一テスト)の点数が相当悪いことが判明した時¹に、2週間は試験対策に専念させてもらって、再受験で点数が改善されていなければ、今アメリカにいることはなかったでしょう。

4年生になった後、研究がある程度形になるまでなかなか出願先を決める事ができず、2011年の9月によく Computer Science, Computer Engineering を中心とする13校・コースに出願先を固めました。ここで、Ph.D.コースだけではなく、大学によっては M.S. (Master of Science, 修士)コースに出願することにしました。その大きな理由は、留学したいという希望が強く、日本の大学院入試を受験していなかったことにあります。いわば背水の陣で出願するにあたり、全て不合格になる可能性を減らすため日本人留学生の平均より多く、レベルの異なる大学に出願することを考えました。そして、各大学の Computer Science Department に限らず、自分が進学したいと思うコースに幅広く出願することにしました。留学を思い立ってから出願先を最終的に決めた2011年9月までに、Ph.D.コースと M.S.コース双方の情報も集めていたので、それをできるだけ活かすことにしました。

結果、13の大学、コースを出願先として選び、2011年12月から2012年1月にかけて出願しました。アメリカには規模も場所も違う様々な大学が特徴的なコースを持っているので、選択肢は膨大にあります。13個も自分が興味を持てるコースがあったのはよかったことでした。(ただし、13校出願をするのは相当大変なので、6-7校に絞るのが妥当だったと思います)

3. 進学先の決定

3月上旬には CMU に加えて、Rice University と Dartmouth College の Ph.D.コースから合格通知がありました。しかし、自分が Ph.D.コースに応募した中で特に希望していた Cornell University, UCLA など是不合格となり、進学先の選択は難しくなりました。実際、Computer Science は世界的に見て人気のある分野で Ph.D.コースに合格するのは他の分野よりも難しいということは予想していましたが、それを実際に経験することになりました。このとき、自分が大学院で学びたいことを改めて考え直すことにしました。

最終的には、M.S.コースであっても CMU の環境は自分が一番求めているものだと考えました。特に Rice University との選択は難しく、キャンパスを訪問し、指導教員になる予定だった先生とも話しましたが、その前後に訪れた CMU の環境の方が魅力的でした。自分のいる Information

¹ GRE は受験後2週間以内には結果が分かります。しかし、2011年夏は試験が大幅に改変された時で、この時だけ試験結果が分かるのに相当の時間がかかりました。

Networking Institute は、CMU の情報科学・工学分野でのレベルの高さと幅広さを活かし、Electrical & Computer Engineering Department, School of Computer Science, Tepper School of Business, Heinz College (Public Policy & Technology Management)の4学部・学科が連携した組織です。その背景があっただけでなく、私のプログラムは2年目にシリコンバレーで学ぶというカリキュラムになっています。これはアメリカの大学の中でもかなり独特な方だと思います。自分の中でも、技術だけでなく産業が機能するために必要なことを全体的に知りたい、分野の垣根を越えた協働がアメリカでどのように機能しているのか知りたい、という興味を持っていたので、それには最適の場所でした。結果、入学または辞退の意思を伝える締切である4月15日の直前まで悩みましたが、CMUの環境を選ぶことを決断しました。この決断に至るまで財団の方には相談に乗っていただき、そして学生生活を支援していただいていることに、大変感謝しております。

4. おわりに

今回のレポートでご紹介した進学先の決定までは、思い立ったのはいいものの、その後は苦しいことが多かった時期でした。海外の大学院は日本と全く違う仕組みで学生を選考しているので、そこに慣れる所から始めなければいけないなど、様々なハンデがあります。しかし、それを乗り越えるに見合うだけの様々なコースが海外の大学院にはあります。苦しい期間が終わって、実際にこちらに来てみると南米の学生とまた一緒に勉強する機会もでき、東京とは異なる生活をしていて、自分の2年前の希望を叶えることができている。次回のレポートでは、実際に大学院に入ってみて経験したこと、分かったことをご紹介できればと思います。